

特別支援教育教員養成課程で知る 子どもの障害



前編

中井 滋 先生
宮城教育大学 特別支援教育講座 教授

専門は特別支援教育。肢体不自由教育、病弱教育、自立活動を中心に研究。宮城教育大学附属養護学校長、文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会特別支援教育専門部会委員、日本療学会理事などを務め、宮城県教育委員会、仙台市教育委員会から委嘱された委員会の委員長としても活動。また独立行政法人教員研修センター等における研修会では講師も務めている。

お子さんの成長にともない、「障害」を意識するママは少なくないのではないのでしょうか。実際、ままばれ編集部にも「知りたい」「教えて」の要望を多くいただきます。そこで編集部では詳しいお話聞きに宮城教育大学へ伺いました。二回にわたり「子どもの障害」を考えます。前編では、子どもたちの障害にはどのようなものがあるのか教えていただきました。

障害の種類と特徴・傾向

ままばれ編集部：(以下・M) / 宮城教育大学(以下・宮教)では特別支援学校の先生等を養成するコースがありますが、その「特別支援」の対象となる障害とはどんな障害のことなのでしょう？

中井先生 / 本学の教育学部には特別支援教育の教員を養成する専門課程があります。ここでは①『視覚障害教育コース』(視覚障害者)、②『聴覚・言語障害教育コース』(聴覚障害者、言語障害者)、③『発達障害教育コース』(知的障害者、発達障害者)、④『健康・運動障害教育コース』(肢体不自由者、病弱者)と、特

別支援の対象となる障害を4種別にして学びます。その中の「発達障害」とは後ほど説明しますが「自閉症」や「アスペルガー症候群」「学習障害」(LD)「注意欠陥多動性障害」(ADHD)などですね。

M / ④の病弱者とは、体が弱い子どものことですか？

中井先生 / 心臓や腎臓、呼吸器といった機能に病気を抱える、いわゆる病気の子どものことですね。身体障害者福祉法では「内部障害」としています。

M / それでは、近年注目されている子どもたちの障害にはどんなものがありますか？

中井先生 / 特別支援の対象で言えば、

LD、ADHD、高機能自閉症などです。これらの発達障害を持つ子どもたちが、小・中学校の通常学級にこれだけ入籍しているという調査が出ています。(右記図参照)

M / けっこうな割合ですね。この原因は？

中井先生 / それが分からない。「遺伝」が関係している場合もあるというお医者さんもいますが、それだけではないですし、本当に分からないです。

LDについては数十年前にアメリカで文字がうまく読めない、書けない、計算ができない、不器用なところがある

周囲に理解者がいる、いないで状況は変化

などの子どもが報告されて、教育界で注目されました。それがやがて Learning Disabilities と呼ばれ、日本にもLDとして浸透しました。

M / そうなんですか。LDやよく耳にするADHDは学習面で問題はないのですか？

中井先生 / そうですね。ADHDの場合は好きな内容には集中するのですが、嫌いな内容は勉強しない！という子がいます。注意散漫、多動、衝動性があるのが特徴ですね。LDやADHDは知的障害ではありませんが学習面でもいろいろな困難を伴います。

M / 高機能自閉症はいわゆる自閉症とはどう異なるのでしょうか？

中井先生 / いわゆる自閉症は知的障害を伴います。高機能の方は言葉の発達、対人関係、こだわりの問題があるという点では自閉症と同じですが、知的障害を伴いません。ですから通常学級で教育を受けます。

M / 先生方は対応が難しいでしょうね。

中井先生 / そうですね。通常学級ですからね。他の子どもと違って、気持ちの切り替えに時間がかかりますし、対人関係もうまくありません。集団指導では困難を伴う子どもには支援員が付き添うなど、各学校で工夫しています。人と同じようにできないからといって周囲の人は叱るだけはいけません。こういった子どもの

特性を理解した上で指導することが大切です。周囲に理解者がいる・いないでは状況は変わります。

不安なら
まず相談を



M / 発達障害を確認できる年齢は何歳ごろですか？

中井先生 / 断定はできませんが、言葉が話す時期、2~3歳でしょうか。いつまでも飽きずにテレビを観ている、お友だちと遊ばない、言葉が出ないなどによって保護者の方が気が付かれるようです。ADHDの場合は保育園や幼稚園で集団生活を送ってから診断されるケースもありますね。

M / ささまざまな障害が出てきているんですね。

中井先生 / そうですね。でもね、僕はこう考えたんです。「これぐらいの障害が出てくるのは当たり前のことなんじゃないかな」と。

今お話しした障害は脳の機能の問題で、脳に損傷があるわけではないと言われています。人間の脳は百数十億というものすごい数の細胞が作られ、やがて神経細胞が連絡網をつくり、いろいろなことを認知でき、また行動できるようになる。この精密な認知や動きをほとんどの人が何の問

題もなくできている。それこそが不思議で仕方がない。

障害の勉強をするにつれ、私たちの体がいかに複雑なつくりになっているのかを知り、私自身、障害の捉え方が変化してきました。

しかし本当に何が原因なのでしょうかね？ 栄養？ 環境？

M / なぜなのでしょう。先生が養護学校等にお勤めの頃などはそういった障害を耳にしませんでしたか？

中井先生 / ええ、聞いたことがありませんでした。現在、小学校などを巡回相談で回っているのですが、例えば落ち着きのない子どもの場合、ADHDの特性でそうなのか、家庭でわがままが許されてきた結果そうなのか、よく分からないケースが増えているように思います。保護者の方も不安であれば、まずは相談された方がよいと思いますね。

M / どこで相談すればよろしいのでしょうか？

中井先生 / 小児科で医師に相談していただくか、仙台市の場合はアーチル(発達相談支援センター)、保健福祉センター、宮城県の場合は保健所や子ども総合センターに相談なさるとよいと思います。

宮教でも特別支援教育総合教育センターで相談できますし、意外に知られていないのが特別支援学校でも相談を受け付けているということ。特別支援学校は地域の相談センターとして機能しています。不安をお持ちのお母さんはまずはインターネット等でお近くの相談所をお調べになってみてください。

